

## 『源氏物語』 宿木卷「草のもと」考

櫛 井 亜 依

### 一、はじめに

『源氏物語』宿木卷では、宇治八の宮邸は「草のもと」と表現されている。

右大殿には急ぎたちて、八月ばかりにと聞こえたまひけり。二条院の対の御方には、聞きたまふに、(中略)なほいとうき身なめれば、つひには山住みに還るべきなめり、と思すにも、やがて跡絶えなましよりは、山がつの待ち思はんも人笑へなりかし、かへすがへすも、宮のたまひおきしことに違ひて草のもとをかれにける心軽さを、恥づかしくもつらくも思ひ知りたまふ。

(宿木卷、五卷、三八四頁)<sup>①</sup>

「草のもと」に対する現代諸注釈書の指摘としては、主に三点に集約できる。まず一点目は草深い邸宅という解釈である。ここでは

「草」という表現を草が茂っている状態として捉えており、『新潮日本古典文学集成』では「草深い山莊を」<sup>②</sup>、『新日本古典文学大系』では「草深い宇治の里」<sup>③</sup>、『源氏物語の鑑賞と基礎知識』では「草深い宇治の里」<sup>④</sup>、『源氏物語注釈』では「草深い人里離れた住まい」<sup>⑤</sup>と解釈しており、とくに『源氏物語評釈』では「手入れのゆきとどいていない荒れはてた邸の意」<sup>⑥</sup>という荒廃した邸の像を積極的に読み取っている。

次に二点目は和歌的な表現であるということである。『源氏物語評釈』では「かれ」るは離れるの意に(草が)枯れるの意をひびかす。草の縁語<sup>⑦</sup>、『源氏物語の鑑賞と基礎知識』では「続く「離れ」は「草が枯れる」ことをかける。」という注釈が付されており「草」の縁語である「かる」が使用されていること、この「かる」は「枯れる」「離れる」という掛詞であることが指摘されている。

つまり、「草のもと」は和歌の中で用いられた表現ではないものの、和歌的な修辭が踏まえられていると理解されている。

そして三点目は桐壺巻にも「草のもと」の用例が確認できるということである。これは『新編日本古典文学全集』<sup>⑨</sup>と『源氏物語注釈』<sup>⑩</sup>が指摘しており、古注釈においても『花鳥餘情』からすでに注目されてきた点である。そもそも、この「草のもと」という表現は、現存する『源氏物語』以前の物語や和歌に用例がない。『源氏物語』中においても、この宿木巻の例の他には桐壺巻に一例を確認することができのみである。

もちろん宿木巻の「草のもと」が指し示す場所を宇治八の宮邸とすることは首肯されるが、「草のもと」を実際の邸の状態を説明した表現と捉えて、草深い、あるいは荒れ果てた状態であることを自明のことのように説明することには違和感がある。次に挙げるのは、中の君が都に移ることが決まって、準備が進められている場面である。

かしこにも、よき若人、童など求めて、人々は心ゆき顔にいそぎ思ひたれど、今はとてこの伏見を荒らしはてむも、いみじく心細ければ、嘆かれたまふこと尽きせぬを、さりとて、また、せめて心こはく、絶え籠りてもたけかるまじく、「浅からぬ仲の契りも絶えはてぬべき御住まひを、いかに思しえたるぞ」と

のみ恨み聞こえたまふも、すこしはことわりなれば、いかがすべからむと思ひ乱れたまへり。（早蕨巻、五巻、三五一頁）

早蕨巻では、都に移る準備に余念がない周囲の様子に対し、中の君の宇治を離れがたく思う姿が描かれる。ここでは自分がなくなつた宇治の邸が荒れ果てていくことを想像して嘆いている中の君の姿を描いている。言い換えれば、自分がいなくなるからこそ、この邸宅が荒れ果てていくことを想像して嘆くのであつて、つまりは現時点で荒れ果てているわけではないと解釈できるだろう。

また、中の君が宇治を離れる際には、次のように邸の様子が説明される。

みなかき払ひ、よろづとりしたためて、御車ども寄せて、御前の人々、四位五位いと多かり。（早蕨巻、五巻、三六二頁）

ここからは、匂宮という高貴な人物の使者を迎えるために、あたりをきれいに掃き清め、片付けたことがうかがえる。このような片付けに関する叙述は、これより前の総角巻でも確認することができる。匂宮が紅葉狩りを口実に宇治へ訪れた際、薫からその旨を伝え聞いた宇治の邸の対応は、次のように説明されていた。

御簾かけかへ、ここかしこかき払ひ、岩隠れに積もれる紅葉の朽葉すこしはるけ、遣水の水草払はせなどぞしたまふ。

（総角巻、五巻、二九二頁）

このように、八の宮が亡くなったからといって邸が荒れたという描写もなく、また薫や匂宮の来訪も折々にあったことから、何かにつけ、邸は手入れされていたことが推測される。したがって、中の君が都に移る前から邸は荒れ果てており、そのような中で暮らしていたとは考えにくいということなのである。

そして実際に宇治八の宮邸が荒れ果てていることを中の君が知ったのは次の場面である。

秋の空は、いますこしながめのみまさはる。つれづれの紛らはしにもと思ひて、先つころ、宇治にものしてはべりき。庭も籬もまことにいとど荒れはてはべりしに、たへがたきこと多くなん。  
(宿木卷、五卷、三九五頁)

これは薫が宇治を訪れた際に目の当たりにしたことを中の君に語る場面であり、この薫の発言を通して中の君は初めて宇治の荒廃ぶりを知ることとなる。つまり、前掲の宿木卷の「草のもと」を草が生い茂った荒れた邸と解釈するならば、薫から報告を受けるまで想像の中の物でしかなかった邸のありさまを憶測を表わす表現も伴わずに自明のことのように表現していることになる。このようなことから、中の君が八の宮邸を草深く荒れ果てた邸と表現したと理解する現代諸注釈書の解釈は不自然であると思われるのである。

では「草のもと」はどのように解釈できるのだろうか。本稿では、

「草のもと」が草深く荒廃した邸を意味するという現代諸注釈の解釈が不自然であるという立場から、別の解釈の可能性について検討してみたい。また、『源氏物語』が初出であると捉えるならば、どのような論理において生み出された表現であるのか、論じたい。

## 二、桐壺巻と宿木巻の「草のもと」に関する類似点と相違点

宿木巻の「草のもと」を解釈するためには、『源氏物語』のもう一つの用例も検討する必要があるだろう。そこでまず桐壺巻の用例を確認し、宿木巻の用例と照らし合わせて「草のもと」という表現の特徴を捉えてみたい。

次に挙げるのは、桐壺巻で靱負命婦が帝の命によって更衣の母のもとを訪れた際の邸のあり様について描いた箇所である。

やもめ住みなれど、人ひとりの御かしづきに、とかくつくろひ立てて、めやすきほどにて過ぐしたまひつる、闇にくれて臥ししづみたまへるほどに、草も高くなり、野分にいとど荒れたる心地して、月影ばかりぞ、八重葎にもさはらずさし入りたる。

(桐壺巻、一巻、二七頁)

この邸は桐壺更衣の死後、充分に手入れされることなく、草が生い茂っている状態であった。そしていよいよ命婦が邸から立ち去ろう

という場面において、命婦の心内を描く中で「草のもと」は用いられている。

月は入り方の、空清う澄みわたれるに、風いと涼しくなりて、草むらの虫の声々もよほし顔なるも、いと立ちはなれにくき草のもとなり。

鈴虫の声のかぎりを尽くしても長き夜あかずふる涙かな

えも乗りやらず。

(桐壺、一卷、三三二頁<sup>12</sup>)

この桐壺巻の「草のもと」について明確に語釈を付した現代注釈書はない。唯一『新編全集』の頭注で、「引き歌があるらしいが未詳<sup>13</sup>」と指摘されるのみである。この引き歌の可能性は『河海抄』<sup>14</sup>にすでに同様の指摘があり、『新編全集』の注はそれを踏襲したものであると考えられる。ここからは、和歌的な表現であることは示唆しながらも、引き歌として挙げられるほど表現の一致するものがないという状況がうかがえよう。

いずれも「草のもと」という表現は共通しているものの、この桐壺巻と宿木巻との用例に関して、相違点を見出すことができる。第一に実際に邸に草が生い茂っているか否かという点である。桐壺巻では、靱負命婦の眼前には草高く茂った庭が広がっていたことがうかがえる。一方、宿木巻では、すでに確認したように、中の君はそのような状態の邸を実際に見て、それを表現しているわけではな

った。また第二に宿木巻では「かる」という動詞を伴っているのに対して、桐壺巻では「はなる」という別の表現を伴っていることである。「かる」は掛詞として機能するが、「はなる」では掛詞にはならない。一方、「草のもと」が指すものについて類似点を見出すこともできる。それはいずれの例も人が離れる、あるいは離れようとしている場所に対して「草のもと」が用いられているということである。

では、なぜ離れる対象として「草のもと」という表現が用いられるのか。これについては、和歌が関係しているように思われる。先に相違点として述べたとおり桐壺巻の用例はたしかに「かる」という表現を伴わないが、この地の文自体は靱負命婦が和歌を詠むに至る心情を表わした特に抒情的なものであると解釈できる。この桐壺巻の「草のもと」を含む地の文は、帝への報告のために帰参しようとしていた靱負命婦の足を「もよほし顔なる」虫の声が止め、沸き起こった「立ちはなれにくき草のもとなり」という心情が和歌の詠出へとつながったことを表わすものである。つまり、この桐壺巻の用例は、実景と重なりつつも、和歌の詠出に至る心情表現として機能しているといえる。一方、宿木巻の用例は実景ではないと考えられるが、こちらは和歌的な修辭法である掛詞「かる」を伴っている。これらを踏まえるならば、桐壺巻と宿木巻の用例はいずれも和歌的

な論理に基づいて表現されたものであるといえるのではないだろうか。

### 三、「草」と掛詞「かる」

先に述べたように、桐壺巻と宿木巻の用例がともに和歌的な論理に基づいて表わされたとするならば、それはどのようなものなのか。ここでは、この表現を検討するにあたり、和歌の表現史の中で「草」と掛詞「かる」によって何が表されてきたのかについて考察していきたい。

まずはこれまで掛詞「かる」が先行研究ではどのように論じられてきたかについて確認する。時枝誠記氏は、掛詞について「展開された二の想の間に感情的に見て共通なものを見出せるのである」とされたうえで、『古今和歌集』「山里は冬ぞさびしさまさりける人も草もかれぬと思へば」(巻六・冬歌・三一五、源宗于朝臣)<sup>15</sup>を挙げ、次のように論じられている。

(前略)「かる」という語は、今日考えられている「離る」「枯る」の対立以上に小であって、「水かる」「声かる」と使用せられる様に、物の量の減少して行くことを意味する。若しそうであるならば、この懸詞は僅少の対比によって使用されたものということができる。<sup>16</sup>

このように、言葉の音声的なつながりだけでなく、感情的に見て共通するものがあることを見出し、とくに掛詞「かる」については、草の量と、訪れる人の量が減少して行くという重なりを指摘された。また、窪田空穂氏は、前掲の『古今和歌集』三一五番歌の解釈の中で、次のように指摘されている。

山里に住んでいての冬の寂しさをいったものである。その寂しさをいうに、都を対照として余情的にしているところ、「人も草も」と、一見かけ離れたと見えるものを同列に置いて、「かれぬ」を掛詞にして、自然と人間とに距離を認めない趣を見せているところに、当時の風が見えるといえる。<sup>17</sup>

窪田氏は、自然と人とのあり方を重ねて見るものの見方に、当時の特徴があると指摘されている。窪田氏も時枝氏と同様に、音声的な重なりだけではない、観念的なイメージの重なりが当時にはあったと解釈されている。

これらの先行研究を踏まえるならば、掛詞には音声的な重なりだけでなく物事の捉え方や感じ方の重なりを見出すことができ、それを捉えることが掛詞を含む文脈を捉えることにつながるといえるようではこれらを踏まえて掛詞「かる」が用いられた和歌の用例を確認し、その表現の背景に人と草とがどのように重ねて捉えられているかを考えてみたい。ただし、掛詞「かる」が使用される場合、

「枯れる」対象となるものとして、草以外にも、木や具体的な植物名、その他様々なものが詠まれている。本稿は『源氏物語』の「草のもと」という表現の分析を目的としているため、ここでは「草」という語に対して掛詞「かる」が用いられた『源氏物語』以前、または同時代の和歌の用例に絞って検討することとする。

『源氏物語』以前、またはおおよそ同時代の和歌において、「草」と動詞「かる」がともに用いられる和歌は五九例確認することができる。<sup>⑧</sup> 其中で、人と草とを重ねて捉え、それらに対して掛詞「かる」を用いていると解釈できる和歌は、五九首のうち三九首に及ぶ。まず確認したいのは『業平集』の用例である。

秋はぎをいろいろ風はふきぬともころはかれじ草葉ならねば

（『業平集』一二二）

これは用例の中では古い時代のもので、「草葉」と人の「ころ」を対比している。先に触れた先行研究の指摘とは異なり、草と人のあり方を同じとするのではなく、人と草とのあり方が同じであることを否定するために掛詞「かる」が用いられている。一方、次に挙げる『論春秋歌合』は先の『古今和歌集』三二五番歌に類する用例である。

みぎ

とよぬし

くさもきもおもひもとにかれゆきてしぐれにぬるるふゆはま

されり

（『論春秋歌合』一八）

この和歌では、草、木、思いを並列に挙げ、枯れる様子と思いが離れていく様子を重ねて表現している。

このように、『古今和歌集』三二五番歌以外にも、掛詞「かる」について、時枝氏以来の指摘のように草の量と訪れる人、あるいは人の心、思いの量が減るという意味が重ねられていることがうかがえる。『業平集』以外にも人と草とは異なるということを取って指摘する例もあるものの、この『業平集』一二番歌が他の歌集や物語に所収される場合の方が用例数としては多い。<sup>⑨</sup> したがって「離る」と「枯る」という言葉の音を重ねる表現においては、草の有様そのものに人の心の状態を重ねて表わすことが主流であったといえよう。

一方、草が枯れるという状況だけでなく、茂る状態を読んだ和歌も確認できる。

題しらず

凡河内みつね

かれはてむのちをばしらで夏草の深くも人のおもはゆるかな

（『古今和歌集』巻一四・恋歌四・六八六）

この例は、のちに関係が途絶える状態を「枯れはてむ」とし、それに対して現在の深い思いや人との関係を夏の草深い様子に重ねて表わしている。枯れるときの様だけでなく、繁茂の様子も人の思いと

重ねて詠まれていることがこの例からうかがえるのである。

#### 四、和歌の中で取り上げられる草の部位とその意味

ここでは引き続き『源氏物語』以前、あるいは同時代の和歌について、「草」と掛詞「かる」が用いられる用例を分析し、とくに草のどの部位が具体的に和歌に取り上げられて詠まれているかに着目してみたい。

掛詞「かる」が用いられる際に最も多く取り上げられる草の部位は、葉である。先述の五九例のうち、のべ一二例は「草葉」、二例は「かれは」と表現されている。<sup>20</sup> そのうちの一首に、たとえば『貫之集』が挙げられる。

秋ののうつろふみればつれもなくかれにし人は草葉とぞみる

（『貫之集』六〇六）

これも草が枯れることと人が離れていくことを重ねて捉えていることがうかがえる例である。加えてこの用例では単なる「草」ではなく、草の葉の部分が枯れるという表現となっている。これ以外の例も同様の表現であることから、とくに葉は枯れる部位として認識されているといえる。この「草葉」という表現以外にも、次のような例もある。

かみのこすけもとのぬしあはれにかたらひなどするに、に

『源氏物語』宿木卷「草のもと」考

はかにとしごろのめこどももすてて、はふしになりしは、  
しばしひぜのくににふわのみたけにおこなひて、もろこし  
にわたりにし、いみじうかなしといへばよのつねなり、そ  
のめこどもいまはとて、京へのばりなむとす、みづからは  
その人の心をくみみるにも、又あはれなり、心をおもふに  
も、わりなういみじ

かれぬべきくさのすゑともしらずしてつゆのいのちをなにか  
けけむ

（『檜垣姫集』一二二）

『檜垣姫集』の、「かれぬべき」という表現からは、枯れるものとして「すゑ」、つまり葉先が認識されていることがうかがえる。

一方、次に挙げる『躬恒集』や『古今和歌六帖』の例を見ると、掛詞「かる」の対象となる「草」について、とくに「根」が詠まれるものが確認できる。

いまははやかれはてなましくさのねのかはらでつひにはるをまつかな

（西本願寺蔵『躬恒集』三三四）

今ははやかれはてなまし草の根のたえずもつひに春にあふかな

（書陵部蔵『躬恒集』一八）

いまははやかれはてなまし草のねのもえてもつひに春にあへるかも

（『古今和歌六帖』第六・春草・三五四六・凡河内躬恒）

これらはいずれも躬恒の詠歌として所収されており、下の句に異同



があるものの、いずれも和歌の大意としては、葉が枯れたとしても根が残り、葉の方が枯れてもそこは変わらず、また春になるのを待っているという草を表現することを通して、また会えることを期待するということを表わすものである。『檜垣編集』や『躬恒集』などの例に着目すると、「葉」や「すゑ」など表現にばらつきがあることからくに決まった表現形式があるわけではないようであるが、葉（すゑ）の方は枯れるものとして認識されているのに対し、根は葉が枯れる季節になっても変わらずに残ると認識されているものと推測される。この葉（すゑ）と根の関係は、和歌の表現においては対となる概念であるようである。例えば次の例を確認したい。

世のはかなさの思ひ知らればべりしかば

すゑの露もとの雫や世の中のおくれさきだつためしなるらん

（『遍照集』一五）

これは掛詞「かる」の用例ではないが、葉先に宿った露を「すゑの露」、植物の根元の雫を「もとの雫」と対比的に表現したものである。この和歌は、『古今和歌六帖』や『和漢朗詠集』にも所収されており、草に対する「すゑ」と「もと」は『源氏物語』と同時代において共有なされた対概念であったといつてよいだろう。とくに、根元を表わす表現として「もと」が用いられていることにここでは留意しておきたい。

このように、「草」と掛詞「かる」の用例から、草が茂ること・枯れることと、人との交流やその思いが深まること・離れることを重ね見るという和歌的な捉え方を見出すことができる。草の部位では葉（すゑ）と根もと（もと）は対をなすものとして捉えられており、掛詞「かる」が詠まれる和歌の中では枯れるものとして葉（すゑ）が、葉が枯れても残るものとして根（もと）が対比的に認識されていることがうかがえる。どの部位を和歌で取り上げるかでそこに重ねられる人とのつながりや思いも様々に表現されることになるのである。

#### 五、『源氏物語』の「草のもと」の検討

本章では『源氏物語』宿木卷の「草のもと」について、これまでの分析を踏まえて解釈を試みたい。

このような掛詞「かる」によって表現される草と人との関係を踏まえてみると、本稿冒頭で挙げた現代諸注釈書の解釈とは異なる解釈が可能であると思われる。もちろん、たとえば蓬生巻の常陸宮邸のような雑草が生い茂っているという描写は、人足が遠のいたありさまを表わしているといえよう。しかし、掛詞「かる」が用いられていることに着目するならば、むしろ草の繁茂の様は人とのつながりや思いが深い状態であることを表現するものと捉えられる。つま



り、草の繁茂の様を表現していても、実景として捉えるか、和歌において共有されてきた人と草とを重ねる表現と捉えるかによって、別の解釈が可能となるといえるだろう。

また、『源氏物語』の「草のもと」の「もと」は、すでに考察した和歌の用例を踏まえると、漠然と草そのものを表わしたのではなく、草の根もとをとくに意味しているといえるのではないだろうか。つまり、「草のもと」は、枯れやすい葉（すゑ）の部分ではなく、枯れずに残る草の根もとの部分（もと）をとくに指した表現であり、その「草のもと」に、人に対する根強い思いを重ねて表現していることである。

桐壺巻では、「草むらの虫の声々もよほし顔なるも、いと立ちはなれにくき草のもとなり」と、虫の声のありかである場所を説明する際には「草むら」と表現されていた。しかしその直後の、立ち去りがたい心情を表わす際には「草のもと」と表現が改められている。このことに着目すると、この「草のもと」は単に実景を表わしているだけではなく、葉先が枯れても最後まで残る、枯れにくい草の根もとに重ねて、ともに嘆きを共有する更衣の母がいる場所に対する離れにくさを表わしていると解釈できる。つまり、「草のもと」は、草と人とを重ねて捉える和歌的な表現であり、人に対する思いの強さを、その人にゆかりのある場所からの離れがたさとして表現した

ものであるといえよう。

また本稿の目的である宿木巻の用例についても実景を表わしたのではなく、和歌的な心情表現として解釈してみたい。夕霧の六の君と匂宮との婚儀を耳にした中の君が煩悶する場面においては、「つひには山住みに還るべきなり」と、まず宇治のことが「山住み」、宇治の人々は「山がつ」と表現されていた。このように、匂宮に相手にされず結果として宇治に戻るといふ不本意な出戻りを考えるこの場面では、宇治について「山」にまつわる表現が繰り返されている。とくに「山がつ」については、宇治に住まう者を低くみた言い方であるといえよう。一方、中の君はこの直後、「宮のたまひおきしことに違ひて」と父八の宮の遺言に背いたことを後悔する中で、宇治の邸のことを「草のもと」と表現していた。同じ宇治を表わすのに「山」にまつわる表現から「草のもと」に表現が変わったのは、宇治の「山がつ」から父宮へ、思い浮かべる人物が変わったことと連動していると推測される。この「草のもとをかれにける」について、これも和歌的な表現として解釈すると、草の根もとのすっきり枯れてしまった状態に重ねて、父宮の遺言が込められた宇治から離れてしまったことを表現しているといえる。単なる「草」ではなく「草のもと」と表現されることによって、本来葉の部分が枯れても最後まで残るはずの根もとまで枯れてしまったというような、中の

君の感じている取り返しをつかない断絶を表わす心情表現となりえたのである。

#### 六、まとめ

以上、『源氏物語』で用いられた「草のもと」という表現について、和歌の表現に注目しながら検討してきた。『源氏物語』中のいずれの例も、ある邸を離れるという文脈に用いられ、なおかつ和歌に関わる表現であると想定されることから、「草」と掛詞「かる」を用いた『源氏物語』以前や同時代の和歌について分析を行った。

これらの用例からは、掛詞としての音の重なりに加えて、草の栄枯と、人との関係や人への思いが深まり途絶えていく様を重ねて捉えていることがうかがえる。またとくに「草」に対しては、枯れやすい葉（すゑ）に対し、葉が枯れても残るのが根であるという部位についての認識があることも確認することができる。つまり、人とのつながりを表わすための比喩として草の像を詠むという方法が和歌では共有されていたと考えられる。

これらを踏まえて『源氏物語』の「草のもと」について、草と人とのつながりを重ね見る和歌的な表現としてみるならば、人に対する強い思いを、葉先が枯れても最後まで残る草の根もとに重ねて表現したものであるといえよう。宿木巻の「草のもと」は、遺言に背

き八の宮の思いを絶つ行動をしたこと、つまり自ら宇治を離れてしまったことを、本来草の中でも枯れにくい根もとの部分まですっかり枯れ果てた草の状態に重ねて表現し、中の君の感じた取り返しをつかない断絶を表わしているものと考えられる。桐壺巻の「草のもと」は実景的な側面もあるものの、宿木巻の「草のもと」は、八の宮邸を見ることができない中の君の状況を踏まえるならば、草深い邸という実景を反映した表現としてではなく、心情表現としての意味合いが強い。

引き歌などの顕在的な和歌的表現に対して、「草のもと」は同時代に共有されていた和歌的な発想や物事の捉え方を反映させた潜在的な和歌的表現といえるだろう。「草のもと」が『源氏物語』で作られた表現だとするならば、そのようにして和歌の中で人々が共有してきたイメージを用い、人への思いを、場所への思いに結び付けて人物の心情の機微を描くところに、『源氏物語』の表現の方法の一端をみることができるのではないだろうか。

#### 注

- ① 『源氏物語』本文はすべて新編日本古典文学全集（小学館）により巻名頁数等を示し、一部表記を私に改めた。なお「草のもとを」の本文異同としては御物本にのみ「草のもとに」となっていることが確認される。これについての検討は別稿に譲り、ひとまず「草のもとを」という

本文について考察を進めることとする。

- ② 石田穰二、清水好子『新潮日本古典集成 源氏物語』七巻、新潮社、一九八三年一月、一六一頁。

- ③ 柳井滋、室伏信助、大朝雄二、鈴木日出男、藤井貞和、今西祐一郎『新日本古典文学大系 源氏物語』五巻、岩波書店、一九九七年三月、三五頁。

- ④ 鈴木一雄監修、原岡文子編集『源氏物語の鑑賞と基礎知識 宿木（前半）』、至文堂、二〇〇五年六月、五七頁。

- ⑤ 梅野さみ子、岡本美和子、嘉藤久美子、佐藤厚子『源氏物語注釈』第一〇巻、風間書房、二〇一四年一〇月、八二頁。

- ⑥ 玉上琢彌『源氏物語評釈』第一巻、角川書店、一九六八年三月、一〇九頁。

- ⑦ 注⑥に同じ。

- ⑧ 注④に同じ。

- ⑨ 阿部秋生、秋山虔、今井源衛、鈴木日出男『新編日本古典文学全集 源氏物語』五巻、小学館、一九九七年七月、三八四頁。

- ⑩ 注⑤に同じ。

- ⑪ 『花鳥餘情』（伊井春樹編『源氏物語古注集成 松本本花鳥餘情』桜楓社、一九七八年、三〇七頁）には「草のもととはよもきかもとのすみかをあらす心なり此詞は桐壺の巻にもあり」とあり、雑草の生えた荒れた邸であるという旨の指摘もある。『孟津抄』（野村精一編『源氏物語古注集成 孟津抄下巻』桜楓社、一九八二年、一六三頁）と『岷江入楚』（中田武司編『源氏物語古注集成 岷江入楚 第四巻』一九八三年、桜楓社、三三五頁）も『花鳥餘情』と同様の注を付す。また『細流抄』（伊井春樹『源氏物語古注集成 内閣文庫本細流抄』桜楓社、一九八〇年、三八九頁）には「故郷のやとりをいへり桐壺巻に此詞あり」という注が付さ

れている。

- ⑫ 「草のもと」の本文異同として国冬本の「ところのさま」となっていることが確認できるが、本稿ではこれについては論じないこととする。

- ⑬ 阿部秋生、秋山虔、今井源衛、鈴木日出男『新編日本古典文学全集 源氏物語』一巻、小学館、一九九四年三月、三一頁。

- ⑭ 玉上琢彌『紫明抄 河海抄』角川書店、一九六八年、二〇〇頁。『河海抄』には「古哥詞未勘 蓬かも同風情歌」とある。

- ⑮ これ以降の和歌の引用はすべて『新編国歌大観』DVD-R（角川学芸出版）により巻、歌番号等を挙げた。ただし物語中の和歌の場合は、『新編国歌大観』記載の歌番号のあとに、『新編全集』に基づく段を（ ）内に記載した。

- ⑯ 時枝誠記『第二篇第六章 国語美論（国語学原論（下））』、岩波文庫、二〇〇七年、二六七頁（初出は『国語学原論』岩波書店、一九四一年）。

- ⑰ 窪田空穂『古今和歌集評釈 上巻』、東京堂出版、一九六〇年、四九六頁。

- ⑱ 和歌の用例検索には『新編国歌大観』DVD-Rを用いた。また本稿での考察の対象としては、時代順に検索結果を表示した際の、『源氏物語』と同時代の歌人の家集である『伊勢大輔集』までとし、それに続き表示された『四条宮下野集』以降の検索結果は含めないこととした。また、この三九首については、本稿の中で引用した和歌および後の注⑲⑳で挙げた和歌以外に以下のものを含む。『古今和歌集』巻六・冬歌・三三八、書陵部蔵『躬恒集』二九二、三一九、『宗子集』一五、『陽成院一親王姫君達歌合』六、『九条右大臣集』三九、『古今和歌六帖』第二・九八三、第六・三五六九、三五七〇、三五七一、『如意法集』一六、『好忠集』三三〇、『馬内侍集』三五、『和漢朗詠集』巻下・五六四、『和泉式部集』七二三、『相模集』五五八、『三十六人撰』九七、『定頼集』（出光

美術館蔵本）六六、（尊経閣文庫蔵本）三九〇。

- ①『後撰和歌集』巻第四・夏・二二四、『古今和歌六帖』第一・四一六、『大和物語』二六六（一六〇段）に『業平集』一二と同じ和歌が確認できる。また『延喜御集』三も「霜さやぐのべのくさばにあらねどもかどか人めのかれまさるらむ」とあり、草とは違うものとしつつも人目へと発想がつながるところが着目される。

- ②「草葉」の用例は『業平集』一二、『是貞親王家歌合』三三、『貫之集』六〇六、『延喜御集』三、『後撰和歌集』巻第四・夏・二二四、『古今和歌六帖』第一・四一六、第二・一一四四、『斎宮女御集』一五〇、『平中物語』四一（九段）、四二（九段）、『大和物語』二六六（一六〇段）、『好忠集』二九六、「かれは」の用例は『伊勢大輔集』（東海大学蔵本）六一、（彰考館蔵本）一四九に確認できる。なお、この中には同じ和歌が他の歌集や物語に所収されているものも含む。

〔付記〕 本稿は、二〇一九年度古代文学研究会大会における口頭発表に基づくものです。ご教示くださいました方々に、心から謝意を申し上げます。